



うきうき わくわくの 夏休みへ



待ちに待った夏休みが始まります。43日間という長い期間、小学生が自分で時間を管理して計画的に過ごすということは、容易なことではありません。学校では、学年に応じて休み中の暮らしについて指導をしていますが、各家庭において、一人一人の実態にあわせた日々の声かけや見守り、支えが必要になります。学習時間や、テレビ・ゲームなどの時間を始め、「早寝・早起き・朝ご飯」の生活のリズムや決まりが守れているかなど、日々の子どもの様子を確認しながら、安全で楽しい夏休みにしていただけたらと願っています。2学期の始業式には、一段とたくましくなった子どもたちに会えることを楽しみにしています。保護者の皆様には、1学期、いろいろとご協力をいただきありがとうございました。

安全で楽しい夏休みにするために ～ルールやマナーを守って！～

長期の休みで最も心配されることが、水の事故と交通事故です。学区には、川や池、海、その他にも様々な危険箇所が点在しています。また、幹線道路や線路が東西に走っており、事故に遭う危険性も高い地域です。6月にはPTA校外生活部の方が、皆様方からご指摘いただいた危険箇所の確認と、すでに設置している立て看板の点検や修理等をしてくださいました。夏休みを安全に過ごすためにも、危険な場所で遊ぶことのないようご家庭でもお話をさせていただきたいと思っています。



2年・4年・6年は、笠岡警察署員の方にお越しいただき、健全育成のために、夏休み前に「非行防止教室」を実施しました。決まり正しいくらしや自分の命を守るために大切なことを具体的に教えていただきました。買い物の仕方やお金の使い方など、ルールやマナーをしっかりと守った生活を送ってほしいと思っています。夏休みは、特に子どもの遊びや友達関係、金の管理や子どもの持ち物などに、ご留意いただきたいと思います。

岡山県学力・学習状況調査結果を受けて

今年度、県内の3年生から5年生を対象に実施した結果について、個人懇談でお知らせしました。一人一人の現在の学力及び学習や生活習慣の状況について、個人のデータ等を参考にして、今後の学習に生かしていただきたいと思います。学校では、各学年の全体的な傾向を把握し、日々の授業の中で改善に向けた取組をしていきたいと考えています。ご家庭でも、得意なところやがんばっているところはさらに伸ばし、不十分だったところは重点を置いて学習していくなど、この結果を有効に活用していただきたいと思います。時間に余裕のあるこの夏休み中が、復習する絶好のチャンスです。



七夕飾り

ひかり・こだま学級の子どもたちが全校に呼びかけて七夕飾りをしました。多くの子どもたちが思い思いに自分の願いを短冊に書いて、笹に飾ってしました。きっと、みんなの願いが叶うことでしょう。



(みんなの願い事が叶いますように!)

我が小学校時代の夏休み…回顧録

随分昔の話になるが、私が小学生のときの夏休みは、学校の決まりとして認められていた午前10時から午後6時まで、昼ご飯を食べる時間以外はほとんど家の外で、近所の小学生と群れて広場や山、海を駆け回って遊んでいたと記憶している。遊びと言えば、ボール遊び(野球、6むし、はり付け)缶蹴り、かくれんぼ、ポコペン、セミ採り、鬼ごっこ、地面に線を入れて遊ぶ様々なゲーム等々、自分たちでルールを作って、けんかを繰り返しながらもその都度仲直りをして遊んでいた記憶が蘇る。汗をかくので喉が渇くと、手押しポンプ式の井戸水を漕いで、頭から水をかぶったり、飲んだりして、渴きを癒やしていた。日中ほとんど外で遊んでいたのには、それなりの理由があった。昔は家にクーラーはなく、玩具もほとんどないため、家の中にもつまらなかったが、外に出ると必ず遊び相手がいた。しかし、何より日中外に出て遊んでいた理由は、家にいると母親から顔を合わすたびに、「勉強しなさい」と言われていたからだ。そこで、母にばれないように、逃げ出すタイミングだけを見計らって外に飛び出していたのである。夜になっても、勉強しないから叱られる。そして、口答えをして部屋にこもる。毎日がこの繰り返しであったように思う。母からすれば、勉強をさせることが親としての務め、いわゆる教育ママこそが愛情だと思っていたのではないかと思うが、意に反して私は全くの勉強嫌いになった。

一方で、父親とはほとんど会話を交わすことも、勉強にしろ受験にしろ、とやかく言われたことはなかった。子育ては母に任せていたというよりは、きっと母がいつもガミガミ言っていたので、言わなかったのだと思う。しかし、今になって考えてみると、勉強は嫌いであったが、母のおかげでいやいやながらも宿題だけは必ずしていた。毎日同じことを何度も言われると逃げ出したくなる。でも全く言われないと自分の好きなことしかしない人間になっていたことは疑う余地はない。勉強嫌いな私が、何の因果で教員になったのか、まか不思議である。

こうした経緯で、現在「ほどほどに」という考え方が私のモットーの一つとなっている。しかし、私自身我が子に対して、「ほどほど」の関わり方は全く実践できなかった。この「ほどよい加減」が一番難しいのかもしれない。どうしても、どちらかに偏ってしまいがちである。子育てがいかに難しいかを理解しているつもりだが、自分自身を振り返ってみると、これだけは言えると思う。「親」という漢字は、「木の上に立って見る」と書く。温かく子どもを見守りながら、ほどよく関わっていくことがやはり大切であるということである。さもないと、私のように、勉強嫌いな人間にしてしまうことになりかねない。未だに勉強嫌いになった理由を母のせいに行っているところが、何年歳を重ねても、私が成長していない証でもある。

きっと今でも、あの世から、母親には「遊んでいる暇があったら、もっと勉強しなさい。子どもたちのために仕事をしなさい。」と叱られ、父親からは黙って見守られているような気がする。